

『楞伽經』の成立時期について

——三性説という視点から——

石 橋 丈 史

1. はじめに

『楞伽經』の成立時期については、従来世親との前後関係を中心に考えられてきた。如来蔵思想と唯識説を統合した、世親以後の発達した段階の經典として位置づけられる一方で、『釈軌論』における引用から、少なくともその原型が世親以前に成立していた可能性が指摘されたのである。そのような中、Takasaki [1980], 久保田 [1984] によって「偈頌品」が經典に先行して成立したのではないかという仮説が提起された。高崎は、各品末尾に重頌として添えられる「偈頌品」との共通偈に注目し、その偈に対して註釈を施すことで同經が成立したのではないかと推察した。そして、「偈頌品」を、瑜伽行者たちの間で古くから保持されてきた偈の集まりであるとし、それが初期瑜伽行派文献となり得る可能性を指摘したのである。これを受け、堀内 [2009] は、「偈頌品」→『釈軌論』→『唯識三十頌』→『四卷楞伽』の成立順序を想定した。

本稿では、そうした「偈頌品」先行説について、三性説という視点から検証し、それによって『楞伽經』の成立時期を考察したい。

2. 「偈頌品」の三性説

「偈頌品」中に説かれる三性説を見ていくと、唯識を前提としているのか不明な偈が多く含まれていることが分かる。以下の偈は、第二章「三万六千一切法集品」中において重頌として引用される偈の一部である。高崎説に従えば、成立が古いとされる重要な偈である。

遍計所執性は有るが、依他起性には存在しない。遍計所執は迷乱によって取られ、依他起は分別されない。(289) (II-183)

様々な部分によって生起した幻は成立しないように、様々な分別された相 (nimitta) は成立しない。(296) (II-184)

(116) 『楞伽經』の成立時期について (石 橋)

相と麁重からなる束縛は、心より生じるものである。遍計所執は、無知な人々によって、依他起において分別される。(297) (II-185)

遍計されたものは、まさに依他起である。様々な顕現をもつ遍計されたものは、依他起において分別される。(298) (II-186)

世俗と勝義とがあり、第三の因をもつものは存在しない。遍計されたものが世俗といわれ、それを断滅したものが聖者の境界といわれる。(299) (II-187)

遍計されたものは存在しないが、依他起は存在する¹⁾。増益と損減をもつ分別は我々にとって消滅する。(305) (II-191)

もし遍計されたものが存在せず、依他起が存在するのであれば、存在なしに存在があり、存在は非存在より生じたものである。(306) (II-192)

遍計されたものに依って依他起が捉えられる。相と名の結合から、遍計されたものは生じる。(307) (II-193)

遍計されたものは究極的には存在しないし、他に依って生起するものも成立しない。その時、清浄なる勝義の自性こそは存在すると知られる。(308) (II-194)

相は依他起であり、名はそこ(相)で分別されたものである。遍計所執相は、依他起より生じる。(373) (II-197)

これらの特徴としては、まず、三性説が一般的な存在論の点から説かれており、唯識と結びついていない点が挙げられる。なかには、297 偈のように唯識との繋がりを予想させるものもあり、他には『釈軌論』が引用する 150-155 偈 ab はまさに唯心と結びついた三性説を説いている²⁾。しかし、ここに挙げた偈では、三性を表わす (pari)kalpita, paratantra という語が、外界の存在物である bhāva にかかる形容詞となっていること (305-307 偈)、また、三性説が二諦説の観点から説かれているようにも読み取れること (299, 305 偈) から、唯識と結びつく以前の、原初的な三性説である可能性が高いと考えられる。

次に、三性説が五事説の要素[相、名、分別、真如]によって定義づけられている点を指摘できる。373 偈の他、138 偈において、「迷乱の相が分別であり、依他起相である。その相における名が遍計所執相である」とされるように、相、分別が依他起性、そこにおける名、あるいは、相と名との結合 (307 偈) が遍計所執性であるといえる。円成実性については真如とされる (455 偈)。

このような三性説は、『解深密経』『瑜伽論』『撰決択分』所説の三性説に類似していると考えられる。先行研究によって明らかにされているように³⁾、『解深密経』『瑜伽論』『撰決択分』所説の三性説は唯識を前提としたものではなく、「偈頌品」同様に、三性説が五事説によって定義づけられている。とりわけ、「相と名に基づいて遍計所執相を理解する」という定義は『解深密経』の古形にも見られるが⁴⁾、それとパラレルな偈が「偈頌品」にも存在している (307 偈)。

3. 散文部分の三性説

それでは、散文部分の三性説はどうであろうか。まず、先の 289-373 偈を引用する箇所であるが、その部分では大慧菩薩が釈尊に遍計所執性の区別のあり方を問う形で話が展開する。それによれば、有と無という点から、依他起に対して執着した凡夫たちは、種々なる遍計所執性を執着する。依他起性を様々な顕現の如き幻であるとし、凡夫は幻を別に見る知覚によって分別する。しかし、幻は種々（なる遍計所執性）とは別ではなく、別でないのでもない⁵⁾。ここでは、三性説を唯識によって解釈しているようには考えられない。むしろ 296 偈の内容を三性説として発展的に解釈しているようにも考えられる。その意味で、「偈頌品」と時代的、思想的にも繋がりが強いのではないかと考えられる。

しかし、その他の箇所では、唯識との結びつきが見られる。

依他起性において、遍計所執性である分別心の相が多種多様に顕現する。事物の分別の相に執着する習気により、分別は遍計所執性の相として生じる⁶⁾。

依他起性を所依として種々の遍計所執性の執着が生起するがごとくである。かれは、そこにおいて、有ではなく、無ではなく、有無でもない。虚妄分別の相であるからである⁷⁾。

「刹那品」においては、三性説、八識、二無我は五法の中に包摂される。そこで、名と相は遍計所執性と定義され、それを所依として起こる分別は、心・心所となづけられ、依他起性といわれる。正智と真如は円成実性として定義づけられる⁸⁾。「偈頌品」では相が依他起性とされたのに対し、「刹那品」では、相が遍計所執性とされ、依他起性は心心所とされている。これは相が識に顕現した⁹⁾、虚妄分別の対象とされるからである。また依他起性と遍計所執性との間に、「主—客観」という認識関係が認められ、この点からも唯識的な三性説となっていることが分かる。

こうした三性説は『大乘莊嚴經論』『中辺分別論』に説かれるものと類似していることは明らかだろう。『大乘莊嚴經論』では、依他起性を所取・能取の三種の顕現をもつ虚妄分別であるとし、その虚妄分別の相（=対象）が遍計所執性であると定義づけられている。三種の顕現とは、一切法が虚妄分別に顕現することを意味し、三性説と唯識説とが結びついている。『中辺分別論』でも同様である。

4. まとめ

以上の結果から、次の結論が導き出される。すなわち、三性説という点から見

(118) 『楞伽經』の成立時期について (石 橋)

た場合、『楞伽經』「偈頌品」は、散文部分以前に成立していたという仮説は妥当であり、その対応関係により同経は『解深密經』や『瑜伽論』『攝決択分』から『大乘莊嚴經論』『中辺分別論』へと唯識説が確立されていく時期にかけて成立した可能性が考えられる。

-
- 1) 龍樹作とされる *Acintyastava* (*As*) 45 偈 cd との共通偈。津田 [2003] によれば, *As* は二諦説という観点からこの偈を説いている。 2) 153 偈「縁より生じた自性は、分別によって分別する。外界に対象を見ることは虚妄であり、対象はなく、心のみである」。しかし、150–155 偈 ab は「偈頌品」のみにあり、「偈頌品」と『四卷楞伽』双方にあるものを最古層とする高崎説に従えば、後に付加された可能性の余地を残すものである。『四卷楞伽』との重複偈においては、唯識と結びつく三性説は見られない。 3) 兵藤 [2010] pp.277–336 参照。 4) 高橋 [2005] p.57 参照。 5) LAS.127.14–130.6. 6) LAS.56.14–57.7. 7) LAS.118.1–6. 8) LAS.227.10–16. 9) LAS.225.18.

〈略号及び参考文献〉

LAS: *Laṅkāvatārasūtra*. Ed. Nanjio Bunyiu. Bibliotheca Otaniensis 1. Kyoto: Otani University Press, 1923.

四卷楞伽: 求那跋陀羅訳『楞伽阿跋多羅宝經』(A.D.443)

久保田力 [1984] 「『楞伽經』の形態的成立史論」『論集』(東北印度学宗教学会) 11

高橋晃一 [2005] 『『菩薩地』『真実義品』から「撰決択分中菩薩地」への思想展開——vastu 概念を中心として』山喜房仏書林

津田明雅 [2003] 「*Acintyastava* と三性説の関係について」『南都仏教』83

兵藤一夫 [2010] 『初期唯識思想の研究——唯識無境と三性説』文栄堂書店

堀内俊郎 [2009] 『世親の大乘仏説論——『釈軌論』第四章を中心に』山喜房仏書林

Takasaki, Jikido [1980] “Analysis of the *Laṅkāvatāra*: In Search of Its Original Form.” In *Indianisme et Bouddhisme: Melanges offerts à Mgr Étienne Lamotte*. Louvain-la-Neuve: Université catholique de Louvain, Institut Orientaliste. 高崎直道 [2010] 「『楞伽經』の祖型」『高崎直道著作集』第6巻, 春秋社

〈キーワード〉『楞伽經』, 三性説, 五事説

(佛教大学大学院)